

生きる力を育てる教育は 農業にあると確信しています

JT生命誌研究館 館長 中村 桂子氏

PROFILE

中村 桂子 (なかむら・けいこ) 氏

東京都出身。1936年生。理学博士。東京大学理学部化学科卒。同大学院生物化学修了。三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、早稲田大学人間科学部教授、大阪大学連携大学院教授などを歴任。

1993年から2002年3月までJT生命誌研究館副館長を務め、同年4月から現職。

I
N
T
E
R
V
I
E
W

「自然や他の生き物との共生」。その大切さを唱える一方で、過度な経済合理主義に走り、目先の利益に踊らされ、生き物として正しい判断を下せていない現状があることは否めない。

そのことにずっと向き合い、その拠点としての、JT生命誌研究館も20年が経った。館長の中村桂子氏に、生きることの原点について伺った。

全ての生き物の物語としての「生命誌」

— JT生命誌研究館は、3月1日に創立20周年を祝う催しをなさったとか。おめでとうございます。

中村 はい。ありがたいことに、たくさんの方に来ていただき、「とても良い会だね」と言っていたいただきました。意味のあるまじった仕事が出来たと思っています。

— JT生命誌研究館は、「『生きて

るってどういうこと?』生き物を見つめ、研究し、その過程や成果を表現することを通して、自然・生命・人間について考える場(ホール)」と紹介されています。生命の歴史を読み解いておられるわけですが、なぜ「生命史」ではなく「生命誌」なのでしょう。

中村 学校での歴史の時間では、武將織田信長が明智光秀に暗殺されて、その後、豊臣秀吉、徳川家康が登場して・・・と、トップの人を扱うことが多いですね。生き物でも人間中心の歴史もあり得ます。でも、アリもチューリップもメダカも人間も、生き物として同列で、互いにつながりを持って暮らしている。すべて、38億年前に生まれた、たった1個の細胞を祖先とする仲間です。この歴史物語が「生命誌」なのです。

— 「誌」には、全ての生き物語、という思いが込められているので



すね。

中村 この物語を書くためには、小さな生き物を見るのが大事で、当館の4つある研究室では、チョウ、クモ、ハチ、イモリといった、小さな生き物ばかりを研究しているんです。毎日見ていると、それぞれの生き物語が見えてきて、そこから人間も同じ生き物なんだ、ということもわかります。

—先生は子どものころから昆虫や小動物が好きだったのですか？

中村 普通の女の子でしたよ。兄弟姉妹は5人ですが、年が離れていたので、小学校に入る前までは、母と過ごしましたね。本や音楽が好きで家にいる時間が長かったのですが、当時、東京にもまだ原っぱもたくさんあり、外でおままごともしていました。でも、男の子と一緒に虫取りに夢中になる、という子どもではありませんでしたね。

—子どものころから生物学者になろう！と思っておられたわけでは

ないのですね。

中村 どんな大人になろうかなんて考えたことありません。普通にお母さんになるんだらうな、とは思っていたでしょうが。私、子どもの頃から、今が一番大事な子だったんです。過去のことはすぐ忘れて、先のことは考えない。ずっと今を楽しんでいる人生です。だから今も、今が一番楽しいと感じています。

—常に今が一番楽しい！って素敵ですね。でも悩まれることはありませんか？

中村 もちろん失敗したときは悩みますが、ほんの少して忘れてしまいます。楽天安なんですね。若い館員にもいつも言っているんです。「物事には良いことと悪いことの両面がある。悩んだら必ず良い面を見ましょう。そうすれば大抵のことは解決するから」と。

—館長の言葉、心強いですよね。

中村 若い館員は結構、納得してく

れるんですが、一番聞かないのがわが子。私の言葉なんて馬鹿にするんですよ(笑)。

先生を信頼しない 社会ではダメ

— 今が一番楽しい楽天的なお嬢さん(笑)が、東大理学部化学科に進まれたきっかけは？

中村 高校はお茶の水女子大学の付属でしたが、今と違って高校ものんびりしていて、3年生の秋くらいに「あなた、大学に行くんでしょ？どの分野に行くの？」って聞かれて困ってしまったんです。英語もおもしろい、歴史も好きだしどうしようかなと。何を専門にしたいのかなんてわからない訳です。

— そこが普通と違いますよ。たいていは、どれもおもしろくないし・・・ですよ(笑)。そして、何か出会いがあった？

中村 どの先生も素敵だったのですが、特に化学の先生が素敵だった。女性です。「私のやっていることはすばらしいことなのよ」というメッセージが、からだの中から染み出てくるような方で、ああいう大人になれたらいいな、と思つて化学に進みました。とても単純な理由なんです。その先生が退官されたときの送別会に、私と同時に理科系に進んだ仲間が50名ほど集まったのですが、その仲間が全員「先生に憧れて理科系に進んだ」と言うのです。全員ですよ。すごい先生だと改めて感じました。

— 人生を変える師との出会い。すばらしいですね。

中村 大学に入つて以降も、先生に恵まれました。40歳を過ぎるまで、先生に従つて考えたり、仕事をしたりしてきたのですが、生命誌研究館は、初めて自分で考えて立ち上げま

した。生き物を機械のように見る生命科学からの脱却であり、生まれて初めて自分だけで考えたのです。20年たち、自画自賛で恐縮ですが、私のやりたかったことができた、と思つています。もちろん、そこでも多くの方から学び、いつも、あの先生はこうおっしゃったな、と思ひ出しながら進んできたのですけれど。

— 先生方の教えに支えられた20年でもあるんですね。教育は先生への信頼が一番だと言われますが、それを体現したお話ですね。

中村 その通りです。大人が先生を信頼しない雰囲気を作つてはいけません。ともいえないことです。確かに、先生もいろいろの方がいます。欠点もあるでしょう。しかし、先生になろうという人は、子どもたちに何かを伝えたいという人に違いないのです。そんな先生のあら探しをやつても、子どものためになりません。

— 「自分が新任の時は失敗もしたが、それを親御さんが助けてくれた。しかも子どもには『先生の言うことをしっかり聞きなさい』と言つて。それにすごく育ててもらった」という先生の話を聞いたことがありません。今は、子どもと親が一緒になつて文句を言う。それでは先生も萎縮してしまいます。

中村 先生を信頼すると同時に、子ども一人ひとりを大事にすることで。38億年、生き物は物語を紡いでいますが、それは様々な生き物の物語が重なつてできているわけです。その一つが私であり、あなたです。それぞれがどういう物語を紡ぐかが大事なのです。紡ぐには時間がかかります。現代社会は「早く早く」と言います。それは生き物にはできません。自動車なら早く作るための工夫ができますが、生き物は難しい。田んぼに苗を植えたら、みんな秋に実る。うちのだけ



一ヶ月で、と言っても無理でしょう。時間をかけて育てることが大事なのです。育てているときが生きていくとき。育てる時間を否定することは生きていくことを否定することと同じです。「早く早く」は生き物には通用しません。

「早く早く」は禁物。肝に銘じます！
子ども親もみんな同じ生き物。「早く早く」は禁物。肝に銘じます！
生きるこの本質を
教えてくれる農業科
—中村先生は、生きることの本質を学ぶ機会として「小学校で農業を必修に」を提唱されてきました。

それを具体化したのが、2007年度福島県喜多方市で始まった「小学校農業科」ですよ。

中村 農業科はすばらしいですよ。初めは3校で始まりましたが、今では市内全部の17校で実施されています。私も昨年9月、収穫の時に行って、生のとうもろこしを子どもたちと一緒に食べましたが、甘くてジューシーでびっくりしました。私は収穫だけですが、子どもたちは、土づくり、種まきから、除草、収穫まで何か月もかけて、畑んぼではコシヒカリ、畑

では大豆、サツマイモ、サトイモ、ネギ、ニンジン、カボチャ、トウモロコシ、大根、白菜などを育てるのです。泥にまみれ、汗を流し一所懸命育てている。大事なのは1年を通して、責任を持って育て続けること。単発的に田植えをする、収穫だけ体験する、ではダメですね。

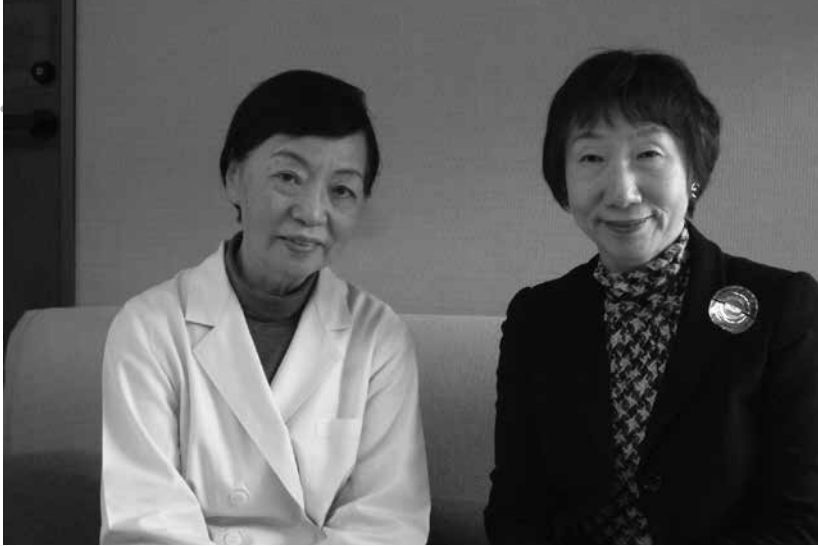
—喜多方市では、3年生から6年生までの総合学習の時間を使って実施されていますよね。年間の半分にあたる35時間をあてているのでしょうか。

中村 さきほどのトウモロコシも、スーパーに置いてあれば「食べ物」。でも自分で育ててみると、「生き物」だとわかるのです。アリやチョウが生き物ということはわかりますが、トウモロコシは動かないから生き物という感覚はなかった。でも、目の前で育っていく姿を見れば、生き物であることを実感できます。そして、私たちはそれをいただく、命をいただくと感じるのです。スーパーで売っているパックの野

菜を食べていても感じることでできない、頭じゃなくて体で学ぶ大切な感覚です。

—まさに先生のおっしゃる「株を学ぶより、蕪を育てよ」ですね。毎年、農業科には作文コンクールがあつて、その中には「お米や野菜からいただいた命」「大変な思いをして育ててくださった農業をしていく方々からいただいたもの」といった言葉も見られます。

中村 子どもたちが書く作文がすばらしいのです。2013年度もたくさん書いてくれたのですが、その中で、一番感動したのが、4年生の男の子の作文です。彼は農業科を受ける前から、大きくなったら農業をしたいと思っていました。普通は、農業科を始める前は、「農業は嫌い」という子が多いのですが、この子は初めから農業をしたいと思っていた。その理由は、彼のおじいさんとおばあさんが農業をしていて、なんでも知っていてすごいから。おじいさん、おばあさんのような人になりたい。だから、農業をしたいと



思っていたわけです。その彼が書いた作文のタイトルが「夢への一步は学校から」。

『僕には夢があります。それは農業をすることです。それは、祖父母に憧れているからです。実際に学校でやってみたら、仲間にすごい人がいました。同じくクラスの○○君は黙っていつもがんばっています。僕も彼のようにやりたいと思います。

僕の作った野菜やお米を食べた人が笑顔になるとうれしいです。農業は天敵も多くて大変だけど、工夫をして作物を守りたいです。学校は夢をくれました。農業家になりたいと思う僕の夢をもっと強くしてくれまし
た』（要訳）

―すばらしい！「夢への一步は学校から」。学校の先生が聞いたら泣きますね。私も涙がこぼれそうです。

中村 この子もすばらしいですが、子どもにこのタイトルを書かせる学校もすごいでしょ？「夢への一步は

学校から」。本来、学校はこうであるべきでしょう。しかし、今、この言葉を子どもが言える学校があるでしょうか。この子が特別なわけではありません。こういう文章が山ほどあるんです。読んでいるとびっくりしますよ。やはり農業科の効果だと思います。

―私どもも、先生をエンパワーするワークショップを計画しています。何といっても教育の主役は先生ですから。その時、先生にも読ませてあげたいです。

中村 そうですね。でも、喜多方市では先生だけでなく、地域のお年寄りを中心としたボランティアの方々にもお手伝いいただいているのです。若い先生だけでは農業はできませんからね。子どもたちや先生もできないことを、ベテランのお年寄りが上手にされるわけです。そうすると子どもたちからは憧れの眼差しですよ。

―地域も一緒になって取り組んでおられる。地域のみんなで子どもを育てる、ですね。

中村 昨年、喜多方市教育委員会が、JA全中・JA都道府県中央会とNHKが主催する第42回 日本農業賞・特別部門で「大賞」を受賞しました。このような賞を教育委員会が受賞するのは初めてではないでしょうか。この時、同じ賞を、たじま農業協同組合も受賞しました。たじま農協のある豊岡市は、市をあげて「コウノトリも住める環境づくり」を進めています。受賞は、その活動の中で生まれた、環境にやさしいおいしいお米と様々な生き物を同時に育む「コウノトリ育む農法」が評価されたものです。私は豊岡市の小学校の応援もしています。ただ、ここまで活動を広げた市長も立派で、上から押し付けるのではなく、反対する人も含め議論を繰り返して進めてくれました。私もその議

論に加わりましたが、確か、話を始めてから開始されるまで2年かかったと記憶しています。

—民主主義のお手本ですね。先生が関わられた取り組みが2つ同時に受賞されるのは！教育に農業を取り入れた成果が評価されていますね。

中村 農業科の教育。私はここに理科教育、人間教育の本質があると確信しています。難しい話をする必要はないのです。

大人はしやがむことから始めよ！

—今の子は農業だけでなく、生き物と触れ合う機会が少ないですよね。

中村 都会でも歩いていたらダンゴムシは見つかるんですよ。子どもは低い所に目が届くので、見つけれられるのです。高層マンションに住んで、地下の駐車場から車に乗って移動していたら会えませんが。少し歩けばコンクリートの道の端っこにいるんですよ。子どもは不思議とダン

ゴムシが好きなんです。あれを飽きずに見ない子どもはいません。お母さんは汚いからダメって言うんですけどね。お母さんと言えば、昔から小学生が使うノートがありますでしょ？

—ジャポニカ学習帳ですか？

中村 そう。チョウやテントウムシや花の写真が表紙に載っていましたよ。それを作っている方に先日お会いしたら、「ついに虫を載せるのをやめました」と。お母さんたちが嫌がるからだそうです。

—ええ！そうなんですか。切り花だけ見て、自然はいいね、というの何か違うように感じます。

中村 理科というのは自然を愛でることです。それは西洋の科学とは違います。もちろん、科学技術を否定するものではありませんが、21世紀は理科が求められる時代だと思っただけです。生き物として自然に向き合え、今をきちんと生きることが大切で、結果として、それが日本の価値

を上げることにつながるのではないのでしょうか。

—最後に子どもたちにメッセージをお願いできますか？

中村 子どもたちに言うことなどありません。子どもは皆、素晴らしいのですから。大人はそんな子どもたちと向き合うために、しやがまないといけません。子どもと同じ目線で話してほしい。子どもたちの言葉はすばらしいですよ。大人はそれを聞いてから立ち上がった、行動したら良いことができるのではないのでしょうか。豊岡のお父さんがつぶやかれました。

「大人が変われば子どもも変わると言われているが、そうではなくて、子どもが変わると大人が変わるんですよ。だって、子どもがやるんだから、僕たちもやらないとしょうがないでしょ？」と。

—子どもは、生き物としての本質を持っているからでしょうね。大人になるにつれて、余計な論理が生き物性を押しつぶしているよう

に思います。

中村 あらゆる国の首相も、大企業のトップも一度、子どもの視点、地面の目線にしゃがんでくださったら違う社会ができるのではないのでしょうか。子どもは本当に素晴らしいものを神様から与えられています。そんな子どもたちの言葉は、大切なことを忘れてしまった大人たちに、いろんなことを教えてくれるはずですよ。

—東日本大震災は、自然と対峙する生き物としての原点に向かわせてくれたのだと思います。あらゆる現象の基盤に「自然の中の生き物」「人間も生き物の中の1つ」があるはずですよ。政治も経済も教育も、それに戻ることから始めなければ、とつくづく思います。

今日はありがとうございました。

インタビュー

公益社団法人日本フィランソロピー協会

理事長 高橋陽子